

# *Tess of the d'Urbervilles*: Tess の身体意識の変遷と 比喩的視覚描写

谷 山 智 彦

## はじめに

*Tess of the d'Urbervilles*<sup>1</sup> は Thomas Hardy の作品の中でも最も知られた作品である。この作品を有名なものとしているのは何と言っても、作品に登場する Alec D'Urberville によるヒロイン Tess の強姦の場面であろう。直接的な描写こそ避けられてはいるが、男女の関係するこのような描写はこの作品が世に出た19世紀末においては周囲を騒がせるに充分であった。その他にもこの作品には Tess の様々な受難が描かれ、そこから当時の女性の置かれた不条理と抑圧的な状況が浮き彫りにされるものとなっている。

Hardy の生きたヴィクトリア朝の英国において、女性は様々な制約、規範によって捕らわれていた。特に中産階級の女性に関して顕著であるが、彼女達は信仰心や道徳など精神的な側面に秀で、男性のような性的な欲求や肉体的な衝動からは解放された存在として考えられた。<sup>2</sup> この女性観は教育などを通じて社会的に浸透し、女性達は結果的にそのように振舞うことを求められたのである。つまり、彼女達の持つ肉体的な快楽や性的な欲求や男性との関係性はこのような社会的な要請の下に禁忌とされ、隠匿されていたのである。結果として女性達は、このような禁忌とされながらも身体に内在する性的な欲求や情念と周囲から求められる規範との間で葛藤を抱えることとなっていた。Hardy は女性の禁忌とされた問題、そしてそれに関わるこうした葛

藤に向き合い、作品の中に示し、テーマとしているのである。

当時は目を向けられず、隠された問題、即ち、こうした身体存在感や快楽、情念葛藤を表す手段として、Hardy が多く巧みに取り入れたのは光や闇といったものを中心とする視覚的な比喩描写であった。この作品の主人公の Tess の身体や彼女を取り囲む風景などには月光や陽光、ランプの灯り、そして夜の闇といった光や闇の描写が多用され、非常に暗示的な印象を醸し出しているのである。彼はこのような比喩を巧妙に行使することによって、当時、禁忌とされ、直接的に語られ難かった問題を極めて印象的に読者に提示しようとしていたと考えられる。

この視覚に強く訴える描写を比喩に用いた背景には、画家 J. M. W. Turner の影響が考えられる。この画家と彼の小説との関係性はしばしば言及される場所であるが、この作品に関しては特に強い影響を持っている。これに関して J. B. Bullen は “[Turner’s] effects of light and colour deeply impressed him in the years between his Italian journey in 1887 and the writing of the novel”<sup>3</sup> と述べ、彼がこの小説の執筆の年の前後に、この画家の風景画の持つ独特の光や色彩の効果に強く感銘を受けていたことを指摘する。Hardy 自身もまた、この画家の風景画を賞賛しており、特に観察者の主観的印象を色濃く描いた風景の中の光や闇の効果に関しては強く感銘を受け、只ならぬ影響を被っているように思われる。彼はこの画家からこうした光や闇の持つ比喩的な効果や、視覚的に見る者に訴える強い力を見出し、作品に取り入れたと考えられる。(また、同時に Hardy はこの作品の出版の前にイタリアへ旅行しており、その地で見た風景の影響も考えられる。特に Venice の風景に関して彼は “Venice is composed of blue and sunlight. Hence I incline, after all, to ‘sun-girt’ rather than ‘sea-girt’, which I once upheld”<sup>4</sup> とその印象を語り、風景における光の印象に魅せられていたことが窺える。) 本稿ではこのような光と闇の描写と主人公 Tess の性的欲求や感覚、意識そして葛藤との関係に注目する。

既に述べたように、作品で頻出するこうした光と闇の描写は彼女の身体を巡る意識や感覚、情念を表す描写となっているのであるが、具体的には、物

語を通じて大きく変化する Tess の身体意識や葛藤、情念などを視覚的に暗示するものとなっている。主人公 Tess は Alec との関係や Angel との交遊をきっかけに自らの身体を巡る意識、感覚を徐々に変化させる。言わば、物語の進行に従って、彼女は経験を通して、性や身体に関する意識や感覚を成長させるのである。身体や性に関して彼女は時に喜びを感じ、同時に恐怖や苦悩といった複雑な感情も抱きながらも、そうした経験を通じて、Tess は独自の身体に対する観念や美意識に到達する。そうした過程をこの物語は示しているのである。こうした経験を通して成長する人物像は Hardy のこの作品の特徴の一つであり、この点を Mary Jacobus は “Hardy’s conception of character is an organic one. He starts with an unformed heroine, and shows us the emergence of a reflective consciousness [...]”<sup>5</sup> と指摘する。主人公は成長し経験を経て、“reflective consciousness”，即ち思慮的な精神に到達すると指摘されるが、この作品で主人公 Tess は経験を通して身体や性に対する思慮的な精神へと到達するように思われる。このような彼女の意識の葛藤などの経験と成長過程の要所に光と闇はしばしば現れ、彼女の意識や心理と関係する重要な表現となってくるのであり、最終的に到達する精神とも密接に関わってくる。本稿ではこのような彼女の身体に関する意識の変遷と光と闇の描写との関係性に着目する。ここでは、Alec と Angel という彼女が関係を持つ対照的な二人の男性との関係から、それぞれ彼女の意識の変遷とこのような光と闇との関係を考察し、彼女が最終的どのような意識や思想を持つに至ったか、そしてまたそれは如何なる意味持つのかを検討する。

### 1. Alec—身体支配と精神的抵抗

Tess は見目麗しい女性として、その美しい身体が非常に印象的に強調されて描かれる。しかし、彼女自身はそのような自らの身体に関して殆ど無自覚であるように最初は語られるのである。この作品で Tess が始めて登場する場面において、彼女の人生は “a mere vessel of emotion untinged by experience” (13) と語られ、この時点で、彼女の身体は、他者の意思や欲望の

影響も被っていない白紙に近い状態であることが暗示されているのである。Tessにとって、その身体はこの時点では飽くまでもその精神の入れ物であり、それ以上の意味を持たないのである。

Tess の関心の中心は自分の身体やそれを取り巻く現実にはない。むしろ彼女の精神は幻想や夢に強く捕らわれているのである。それが最も明確に現れるのが、この作品の悲劇の嚆矢となる馬車で父の代わりに幼い弟と町に仕事に行く場面である。彼女は星空の瞬く薄闇の中で夢に囚われ、その意識は遠い世界へと運ばれてしまうのである。

Tess fell more deeply into the reverie than ever, her back leaning against hives. The mute procession past her of trees and hedges become attached to fantastic scenes outside reality, and occasional heave of wind become the sigh of some immense sad soul, conterminous with the universe in space, and with history in time. (34)

馬車からの静かに流れる景色とそれを包む夜明け前の闇の中で彼女の想像力と感性は刺激され、その魂は現実を超えた見えざる夢の彼方へと誘われるのである。彼女はここで東の間、労働に勤しまなければならない辛い生活から逃れるために闇深き遠い星空に思いを馳せ、夢に耽るのである。上記の引用に“to fantastic scene outside reality”とあるように、この現実の外の世界を強く彼女は志向するのである。

このように彼女は夢にその意識を傾け、深く耽溺する気質を持っているのである。そして、そうした彼女の意識は闇の中で強く助長される。これを実証するかのように彼女は後に次のように語る。

‘A very easy way to feel ‘em go,’ continued Tess, ‘is to lie on the grass at night and look straight up at some big bright star; and, by fixing your mind upon it, you will soon find that you are hundreds and hundreds o’ miles away

from your body, [...]. (154-155)

星空の瞬く闇の中にその身を横たえ、星光に意識を向けることでその魂を現世から遠ざけることが出来ることを彼女は語る。この薄闇と星空の中での体験は彼女の夢想的な精神が夜や早朝の星空の暗闇と強い親和性を持ち、それによって身体を一時的に忘却し夢に耽るという彼女の特徴的な気質を示していると言える。また、この彼女を取り囲む薄闇の空間は彼女の意識の状態を示したものであるとも考えられる。Peter. J. Casagrandeは“event occur semi-visibly, not just in darkness, but in a misty darkness that corresponds to Tess’s semi-conscious mental state, her “moment of oblivion””<sup>6</sup>と述べ、現実を離れ、夢の世界へ向かおうとする彼女の精神的な状況との類似を指摘する。彼の指摘するように、ここでの彼女の半ば夢の中の意識と夜と朝の境のような薄闇の空間は強い類似性を持つ。星が瞬く薄闇の空間は彼女の想像力を刺激し夢へと誘う原因となっているのだが、このように、同時にそのような身体を脱し、夢に耽溺しようとする意識の状態を視覚的に表す表現となっているのである。

このような夢の中にある Tess だが、馬車の事故で否応なく彼女の意識は引き戻される。この事故の場面では、非常に目を引く光の描写によって Tess の様子との事故での馬の Prince の死体の様子が描かれる。

The lantern hanging at her wagon had gone out, but another was shining in her face-much brighter than her own had been. Something terrible had happened. The harness was entangled with an object with blocked the way. (35)

馬車との衝突事故の場面で、接触する馬車のランタンの光は彼女の顔を強く照らす。この光と衝撃によって彼女は現実に引き戻されるのであり、そしてまたこの光によってそれまで忘却していた彼女の身体の実在を改めて実感さ

せられるのである。光と事故の衝撃は身体が存在を強調し、彼女の意識は依然として肉体と繋がりを持っているということを彼女に自覚させる。また加えて、先に Casagrande の指摘で見たように空間の闇は彼女の夢に耽溺する彼女の意識を表象していたのだが、ここで光が空間に突如侵入することによってそうした闇が破られたことが視覚的にも示されるのである。このようにここで光は闇が彼女の夢を助長していたのとは対照的に彼女の意識を現実強く牽引する効用を持った描写となっているといえるだろう。

これに続いて、光は時間の経過に従い、さらに空間を満たす。こうした迫り来る朝の陽光の下で馬の死体の様子が描かれるが、これはさらに視覚的に強く描かれ、その悲惨な現実が彼女に突きつけられる。

The huge pool of blood in front of her was already assuming the iridescence of coagulation; and when the sun rose a million prismatic hues were reflected from it. Prince lay alongside still and stark; his eyes half open, the hole in his chest looking scarcely large enough to have let out all that animated him. (36)

夜明けの風景の中でこの馬の死体は曝される。太陽の光によって流れ出る血液は光を反射し、プリズムのように様々な光や色彩を放つ。Tess はこの死体に当たる太陽の光で唐突に過酷な現実とさらに強く対面させられ、動揺させられる。この独特な描写で描かれるこの馬の死は過酷な現実の情景であると同時に後の Alec による Tess への暴行行為を想起させるものとして、しばしば解釈される。Casagrande もまたこの描写と Alec による暴行との繋がりを指摘している。Casagrande は Alec による暴行とこの事故との類似性を指摘する。彼は “in both cases she is brought to consciousness by a trespass of violent penetration-by the thrust of the mail cart’s pointed shaft into the breast of Prince, by Alec’s forcing himself on her”<sup>7</sup> と述べ、ここで馬の体の傷の描写は男性による Tess の身体への暴行の傷のアナロジーとなり、強くこれを

想起させることを指摘する。このような比喩となる馬の死体を光は強く照らし、その存在を印象的に強調する。光はこれによって、彼女の運命をここで強く読者に印象付ける効果を持つのである。ここで空間に強く差し込む光はこのように彼女の夢を強制的に破壊し、その意識を現実に戻させると同時に、後に彼女に降りかかる不運を読者に強く印象的に予見させるものとなっているのである。そして、この事件を皮切りに彼女の自身の身体に対する感情や意識は大きく変わって行く。

この事件をきっかけに、彼女は家計を助けるという必要性に迫られて、D'Urberville 家へと赴くこととなるが、ここで Tess は Alec と対面し、彼との交流を通して今までは無知であったその身体感覚や悦楽を強く意識させられていく経験をする事となる。Alec D'Urberville は巧みな方法を駆使して、彼女の身体への意識や情念の発生を強く促す誘惑者として描かれるのである。勿論、こうした覚醒する Tess の身体への意識や情念が直接的に描かれることはないが、それは上記の馬の描写と同様に印象的な光を中心とする視覚描写を伴って表され、暗示されるのである。

Alec は初対面で彼女の美しい身体に強く惹かれる。彼は彼女の身体に激しい情念と欲望を掻き立てられ、彼女の身体を我が物としようとするのである。Tess と Alec の会話や交遊の描写には、この Alec の彼女を自らの手中に落とし、支配しようという欲望が各所にまず視覚的に暗示される。例えば、それは以下のように印象的な風景の中で描かれるのである。

He conducted her about the lawns, and flower-beds, and conservatories; and thence to the fruit-garden, where he asked if she liked strawberries. [...]

They had spent some time wandering desultorily thus, Tess eating in an abstracted half-hypnotized state whatever D'Urberville offered her. When she could consume no more of the strawberries he filled her little basket with them; and then the two passed round to the rose-trees, whence he gathered blossoms and gave her to put in her bosom. She obeyed, still like

one dream, and when she could affix no more he himself tucked a bud or two into her hat, and heaped her basket with others in the prodigality of his bounty. (46-47)

Alec は Tess を彼の家が領有する花畑や果樹園へと連れて行き、彼女の服を花で飾り、果樹園の苺を勧める。彼は Tess に自らの領地の産物 “the prodigality of his bounty” によって彩ろうとする。彼は Tess の身体的な美しさをこのように印象的な赤い光沢や色彩を連想させる苺や華やかな多彩色を喚起させる花々で飾り立てることによって強調し、彼女に示す。こうした彼の手による装飾と贈り物によって Tess は “It was a luxuriance of aspect [...] which made her appear more of a woman than she really was” (48) と語られる早熟な自分の豊満な身体が存在を改めて強く実感させられる。Alec もまたそうした彼女の姿に大いにその情念を掻き立てられて、ここで熱い視線を彼女に向ける。尚、この服装は Alec の属する上流階級とその他の下位に位置する階級の差を顕著に示す指標ともなっている。Langland は “The clothes, like a customs, were constructed to distinguish lower classes and ranks from the genteel middle class.”<sup>8</sup> と述べ、服装は権力のステータスを示す機能を持っていることを指摘する。それを示すように、彼女は帰りの馬車で周囲から奇異な目で見られる。

One among her fellow-travellers addressed her more pointedly than any had spoken before: ‘Why, you be quite a posy! And such roses in early June!’

Then she become aware of the spectacle she presented to their surprised vision: roses at her breast; roses in her hat; roses and strawberries in her basket to the brim. (50)

ここで Alec によって飾り立てられた Tess の姿は、帰りの馬車で同乗者と



は質を異にするものとなってしまう。彼女は本来ならば、同乗者達と変わらぬ階級の人物であるのだが、Alec の手によってその容貌を大きく変えられてしまうのである。言わば、ここで彼は Tess を自分の嗜好に沿う所有物に作り変えるのである。彼女の姿は結果として、彼の嗜好と欲望が強く反映した贅沢品の一つとして周囲から見られてしまい、それ以前の彼女とは全く異なったものにされてしまうのである。このように彼女の身体に彼によって齎される過剰な装飾は、彼の Tess の身体への欲望を暗示するものであり、それは彼女を視覚的に大きく変貌させ、彼女を生来の生活圏や文化から引き離してしまうのである。このように、この装飾は Alec の身体に対する支配を強く示した描写であると言えるのである。そして同時にそうして変化させられる Tess もまた戸惑いながらも、自らの身体が存在を強く意識させられると同時に異性から初めて触れられる悦びを密かに感じるのである。

勿論、先にも述べた通り、こうした交遊による悦楽は明確に語られることはない。しかし、この Alec と Tess とのやり取りの描写の後、以下のように語られることで暗示される。

Nature does not often say 'See!' to her poor creature at a time when seeing can lead to happy doing; or reply 'Here!' to a body's cry of 'Where?' till the hide-and-seek has become an irksome outworn game. (49)

ここで唐突に自然“Nature”に関する論議が展開される。ここで“Nature”自然と表されるものは彼女の身体及び性的欲求を含む生物としての人間が本来持つ生理的欲求であると考えられる。こうしたものがここで用いられる背景には Hardy の生物学に関する関心がある。Angelique Richardson は“Hardy repositioned human in nature, at a time when biology was being looked to explain forms of social and sexual behavior.”<sup>9</sup>と述べ、Hardy は人間やその社会を生物学的な視点から観察し、説明付けようとしていたことを指摘している。つまり、Hardy は Tess という人物を生物という観点から捉えるのである。他

の生物の雌雄が本能的に引かれるように、“Nature”即ち、身体及び身体的情動は人のその意思とは無関係に彼女を翻弄させるものであるということがここで語られるのである。つまり、彼女の意思に反して、しばしば身体的、生物の本能的な欲望や情動が彼女を襲い、駆り立てるとということが示唆されるのである。このようなことから、彼女が上記の Alec としての交流を通して着実に女性として本能を刺激され、その本能に基いて、男性との交流で齎される悦びを感じていることが暗示されているのである。Alec はこうした彼女の様子を見逃さず、これに付け入ろうとする。

Alec の計らいで後日、奉公に就いた Tess は D’Urberville 家で鳥小屋の世話を申し付けられるが、そこで彼女のこの男性との接触による身体的な悦楽とそれによる支配はより顕著に表される。そしてここでも光は彼女の身体的な感覚や意識を示す重要な描写となって現れてくる。

In spite of the unpleasant initiation of the day before, Tess inclined to the freedom and novelty of her new position in the morning when the sun shone, now that she was installed there; and she was curious to test her powers in the unexpected direction asked of her, so as to ascertain her chance of retaining her post. (71)

彼女は D’Urberville 夫人から、鳥の世話の為に口笛を吹く技術を習得するように命じられる。その為に Tess は翌日の朝からその練習を行なう。上の引用はその描写であるが、その様子は日光の煌きの下に展開する。ここでの空間を照らす光が暗示するものは、彼女の身体的な高揚である。“Tess inclined to the freedom and novelty of her new position”と陽光の描写の直前で語られているように、D’Urberville 家での新しい環境の刺激による快感と高揚を彼女はここで享受しているのである。ここでの陽光はこのような彼女の高揚感を凝縮して暗示するのであるが、同時にここで太陽は男性的なイメージを包含する。作中においても、太陽は “The sun, [...] had a curious sentiment,

personal look, demanding the masculine pronoun for its adequate expression” (109) と語られており、その内に男性的なイメージを保持する存在であることが示されている。つまり、彼女の新しい環境に対する喜び、高揚感が描写されていると同時に、その背後に男性による彼女の身体の支配が暗示されていると見ることもできるのである。この太陽が暗示するように、彼女は確実に男性による支配を被っている。なぜなら、彼女を高揚させる環境は全て d'Urberville 家の領有物であり、全て Alec のお膳立てによるものだからである。彼女が如何に強い高揚感を感じようともそれは全てこの男性の掌中でのものであり、常に彼女の周囲には彼の支配の手が及ぶのである。こうした支配をこの空間を照らす太陽は暗示していると考えられえ。

こうした環境の中、彼女はさらに Alec に接触され、その支配は強くなっていく。彼は口笛の練習をする彼女に近付き、強く彼女に干渉する。

As soon as she was alone within the walled garden she sat herself down on a coop, and seriously screwed up her mouth for the long-neglected practice. She found her former ability to have degenerated to the production of a hollow sepulchral rush of wind through the lips, and no clear note at all.

She remained fruitlessly blowing and blowing, wondering how she could have so grown out of the art which had come by nature, till she become aware of a movement among the ivy-boughs which cloaked the garden-wall no less the cottage. (71-72)

ここで Tess はひたすら口を窄めて音を出そうとするが、簡単にそれをすることは出来ない。この時の彼女の姿は非常に扇情的なものとなり、特に唇の様子は“screwed up her mouth”は際立って悩ましいものとなる。陽光の下でのこのような扇情的な彼女の姿は強調され、Alec の Tess に対する支配欲をより強く掻き立てるのである。

彼女のこの姿に惹き付けられた Alec は彼女に近付き、この口笛の指導と

いう名目で彼女に接触し、先の装飾の描写同様に彼女を我が物としようとする。

Tess was quite serious, painfully serious by this time; and she tried—ultimately and unexpectedly emitting a real round sound. The momentary pleasure of success got better of her; her eyes enlarged, and she involuntarily smiled in his face. (73)

Tess は彼の手解きを受け、何度も失敗をしながらも、ようやく口笛に成功する。上記はその時の様子である。彼女はここで自分が意図したように身体を動かせたという喜びを感じ、それを笑みという表情で Alec に示すが、これもまた非常に示唆的な描写とも言える。なぜなら、こうした身体的な喜びは Alec の指導の下に齎されたものだからであり、この歓喜の表情を彼に示すという行為は彼女が身体的な快楽によって Alec の支配を受け入れたことを良く表している。そして、先に見たようにこのような描写は陽光の下で展開されるが、彼女を照らす陽光はそうした彼女の身体の籠絡を視覚的に暗示していると言えるだろう。

Tess はこのような快楽に時に溺れる一方で、そのような快楽によって自分が支配されてしまうことを戸惑い、恐れる。そのような恐怖は彼女の日常生活の中の風景とその中で会うこととなる一人の女性との対面の中でやはり印象的な光を伴って現される。

D'Urberville 家周辺の村人達は仕事を終える週末になると、Chaseborough という小さな町で一時の歓楽の時を過ごす。そこで酒宴を楽しんだ後、彼らは朝には再び家に戻っていくというのがこの地の習慣として根付いている。Tess も最初こそ、この習慣に戸惑いを覚えはしたものの、彼らに混じってひと時の歓楽に耽溺するようになる。こうした日常の場面の中には性的なイメージが潜んでいる。以下の引用はそのような日常の酒宴の帰り道の様子である。

It was a three-mile walk, along a dry white road, made whiter to-night by light of the moon.

Tess soon perceived as she walked in the flock, sometimes with this one, sometimes with that, that the fresh night air was producing staggering and serpentine course among the men who had partaken too freely; some of the more careless women also were wandering in their gait [...] and a young married woman who had already tumbled down. (80)

その道の様子は月光に照らされ、その様子は“serpentine course”と描かれる。これは疑いなく聖書の誘惑者としての蛇を暗示する<sup>10</sup>ものであり、月光がこのような道を通る Tess をはじめとする“careless woman”とされる女性の姿を照らし、強調することでこの道中で彼女等らを取り巻く男性達の欲望の視線や誘惑、そして女性達自身の性的欲求や情念の存在が暗示される。

こうした性的イメージに満ちた光景と住人達の中で、Car Darch という一人の女性が特に強く月光に照らされて性的なイメージに満ちた特徴的な姿で Tess の眼前に出現する。彼女もまた、強い性的なイメージに満ち、性的な奔放さを窺わせ、彼女の精神を強く苛むのである。

This leading pedestrian was Car the Queen of Spades, who carried a wicker-basket containing her mother's groceries, her own draperies, and purchases for the week. [...]

All looked at Car. Her gown was a light cotton print, and from the back of her head a kind of rope could be seen descending to some distance below her waist like a Chinaman's queue.

“Tis her hair falling down,” said another.

No; it was not her hair: it was a black stream of something oozing from basket, and it glistened like a slimy snake in the cold still rays of the moon. (81)

家路へと向かう村人達の先頭をこの Car は行くが、その際、彼女に何か細長い蛇のようなものが纏わり付いている様子が月光に照らされ、描かれる。その正体は彼女の荷物から流れ出た糖蜜だが、“it glistened like a slimy snake in the cold still rays of the moon”と語られる。その様子はまさに先の“serpentine course”と同じく蛇のイメージであり、やはり性やそれに関する誘惑を喚起する。このようなイメージはここでもさらに反復されるかのようになり、月光によって強調され、Tess の眼前に迫ってくるのである。

さらにこのような Car の背景からは Alec の存在が示唆される。彼女は、作中で Tess が D'Urberville 家にやってくる前まで Alec のお気に入りの女性であったことが“[she was] till lately a favourite of d'Urberville's” (80) と語られ、表される。このようなことを踏まえると、彼女を取り巻く上記の蛇のようなイメージは彼女を性的な面で誘惑する Alec の存在を強く暗示させる。つまり、彼女もまた Alec との性関係によってその身を彼に支配される存在なのである。こうした彼女と Alec との関係は現在の Tess と Alec の関係と類似する。言わば、Tess にとって、Car は Alec に性的に支配される自分の鏡像のような存在とも言えるのである。この女性は月光によって存在感をさらに強められながら彼女の眼前に迫る。こうした Car との交流で Tess はすっかり疲弊してしまうこととなるが、その背景にはこうした恐るべき自分の鏡像のようなイメージとの対面による精神的疲弊と恐怖があり、この女性からは視覚的にそれが強く暗示されているのである。

Tess はこうした疲弊により、意識を暫時的に喪失して行く。そして、その中で Alec によりその身体は暴行を被ることとなるが、ここでの意識の喪失と混濁は Tess にとって重要な意味を持つ事象である。期せずして彼女は意識を希薄化させるが、ここでの彼女の意識の混濁と喪失は彼女の前に立て続けに迫る強烈な性イメージと、それによる支配から逃れるための防衛行為ではないだろうか。この偶然の意識喪失からは、性や Alec の存在に動揺し恐怖を抱いた彼女の深層意識が働き、こうした突然の行動に駆り立てているかのような様子が読み取れる。彼女は先に見たように生来、夢想的な性格を

持ち、現実逃避的な傾向があったが、ここでは自らの精神を守るためにそれが発揮されたのではないだろうか。Tess は眼前で目撃した身体的な情念に支配されないために意識を身体から引き離し、眠りに落ちていく。Car と諍いを起こした後、Alec によって助けられるがこの時、彼女の意識の混濁は頂点に達し、喪失へと向かっていく。馬上のこの男女を取り囲む情景には彼女のこうした意識が強く反映して描かれる。

She was silent, and the horse ambled along for a considerable distance, till a faint luminous fog, which had hung in the hollows all the evening, become general and enveloped them. It seemed to hold the moonlight in suspension, rendering it more pervasive than in clear air. (85-86)

月光の下、二人は馬で移動するが、その周囲の風景は突如として霧 “a faint luminous fog” に包まれ始める。霧は淡い光を含みながら、Alec と Tess を包み込む。この霧により彼らの周りの情景は徐々に明確な輪郭をなくしていくのである。このような明るさを徐々に失っていく情景は “inexpressively weary” (86) と語られる猛烈な眠気に襲われる彼女の意識を視覚的に表しているのである。

このような状態の Tess に対し、Alec は “We know each other well; and you know that I love you and think you are the prettiest girl in the world, which you are. May I treat you as lover?” (87) と発言し、強く彼女を求め、迫る。こうした彼の露骨な欲望の露呈に対して彼女の無意識的な防衛はさらに強固なものとなり、さらに意識を闇の奥へ沈めていく。こうした彼女の意識の動きに従い、彼女の周辺の風景も光をさらに失い、深い闇へと落ちて行く。この時の様子は “With the setting moon the pale light lessened, and Tess became invisible as she fell into reverie upon the leaves [...]” (89) と表され、彼女が意識を失うのに並行して、月光は陰り、彼女自身も闇へと隠され見えなくなっていくのである。そんな彼女の身体に対して Alec は欲望を向け、暴行を

図ろうとする。

‘Tess!’ said D’Urberville.

There was no answer. The obscurity was now so great that he could see absolutely nothing but a pale nebulosity at his feet, which represented the white muslin figure he had left upon the dead leaves. Everything else was blackness alike. D’Urberville stooped; and heard a gentle regular breathing. She was sleeping soundly. (90)

しかし、以上の描写で彼女は完全にその意識を失い、眠りに落ちている。この意識と連動し周囲は闇に閉ざされ、全ては完全に闇の中へと飲み込まれてしまう。ここでの暗黒は彼女の意識が完全に喪失し、身体から乖離したことを視覚的に示しているのである。

この暗黒の描写の中で隠されながら、ついに Alec はここで彼女と直接、性的に接触し、自身のものとするのである。しかし、それは飽くまでも彼女の身体に限ったものである。ここで彼女の身体は彼の毒牙に掛かっているが、その精神は肉体には不在なのである。それ故に決して彼女の精神は彼の支配下に入ることはない。意識の乖離と喪失によって彼女の魂は蹂躪を免れるのである。暗黒によって示される Tess の意識の喪失はこうした彼女の魂の防衛を如実に示しているのではないだろうか。換言すれば、彼女の意識の喪失を示す暗黒は、彼女の肉体を我が物にしようとする Alec に対する静かな抵抗の意思を暗示するものともなっているのである。

このようにして彼女の精神は巧みに彼の肉体的な支配を逃れる。自身に向けられる性的なものや男性的な欲望に対して、意識を失うという方法によって Tess は自身の魂を自衛するのである。しかし、その身体が Alec の手に掛かったということは事実であり、この事実から逃避することは決して容易ではない。上記の暴行後も彼女は Alec から継続的に性的関係を持たされ、それに苛まれる。その様子は下記の描写に示唆される。



She thereupon turned round and lift her face to his, and remained like a marble term while he imprinted a kiss upon her cheek—half perfunctorily, half as zest had not yet quite died out. Her eyes vaguely rested upon the remotest trees in the lane while kiss was given, as though she were nearly unconscious of what he did. (99)

Tess は Alec による暴行の後、しばらくして D'Urberville 家を離れ、地元へ帰郷することとなるが、D'Urberville 家を離れる際に Alec に声を掛けられ、思いとどまるように迫られる。上はその時の描写である。彼はこの時も執拗に Tess に対して身体的な接触を求める。それは、“he imprinted a kiss upon her cheek” (99) と描かれ、彼の欲望は依然としてその身体に強く向けられていることが示される。また彼女は こうした自分の身体を指して、“how you've mastered me!” (99) と発言することからも、彼女の身体は夜の暴行以降も彼の手によって継続的に支配され続けていたことが暗示されている。

そのような彼に対して、Tess は視線を決して向けようとしなない。“Her eyes vaguely rested upon the remotest trees in the lane” とあるように、彼女はその視線を逸らし、遠くの風景に目をやる。また同様に彼が話しかけても、彼女は人形のように“like a puppet” 心ここに在らずの状態である。ここで、彼女は先の暴行の際のように、意識を逸らし、その魂をやはり闇の中に沈められていると考えられる。つまり、ここでも彼女は依然として同じ手段によって、彼の身体的支配に抵抗し、魂を自衛しようとしているのである。このような Tess の Alec に対する行動は Rosemarie Morgan も次のように述べ、彼女が彼に対して静かに反抗する意思を持っていることを指摘している。

Distancing unwanted sexual advances she is simultaneously fully aware of how best she may repel them. There is, in passive resistance of this kind, deliberate, conscious rebellion and considerable self-control.<sup>11</sup>

Morgan はこのように視線を Alec から逸らすことによって、自らが望まない性経験から精神的に距離をとり、抑圧するという彼女の精神的な動きを暗示していることを指摘し、このような彼女の行動は彼に対する静かな抵抗であるとする。これはまさしく、前述した彼女の意識の喪失とそれによる抵抗そのものであり、的確な指摘と言えるだろう。このようにして、彼女の魂は巧みに彼の手には落ちるのを避け、彼の支配に抵抗の意を示しているのである。この Tess の行為は密かなる抵抗の意を示すのみでなく、さらに Alec にも強い影響を与える。Richard Nemesvari はこの Tess の行為は Alec の男性としての意識を大きく動揺させるものであることを指摘する。

Tess's complete uninterest is clear, and she is twice given the opportunity in their final confrontation to declare that she does not love Alec; on this level she rejects him. Further, Tess's mournful sense of defilement manages to touch Alec, so that the narrator informs us that he 'emitted a laboured breath, as if the scene were getting rather oppressive to his heart, or to his conscious, or to his gentility.'

Certainly this is the first time we have been told that Alec possesses either a heart or a conscious, [...] he is no longer able to position himself as an uncaring seducer. Tess, and his by this point unreciprocated desire for her, has managed to undermine the masculine identity he has constructed [...].<sup>12</sup>

この彼女の Alec の拒絶は、彼の意識に強い圧力を与える。彼はここで、Tess が他の女性のように自分の手中に納まらないということに強い衝撃を受けるのである。ここでこれまで Car などの多くの女性を、肉体関係などを通して誘惑してきた彼の男性としての自信や自意識は大きく動揺、弱体化させられてしまうのである。これもまた彼女の男性に対する静かな抵抗であり、また報復でもあると言えよう。

このように Tess は Alec に身体こそ蹂躪されてしまうが、その精神は静かに彼を拒絶し、抵抗する。その精神は、彼の一方的な支配から脱しようとするのである。そうして彼女は Alec を拒否し帰郷するが、Alec の手に掛かった自分の身体に対しては否応なく意識を向けさせられることとなる。Tess は帰郷の道で、壁にペンキで宗教的スローガンが書かれている光景を目にする。その言葉は“THY, DAMNATION, SLUMBERTH, NOT” (101) である。この標語は光に照らされ、輝いて彼女の視界に入り込む。“Against the peaceful landscape, the pale, decaying tints of the copses, the blue air of the horizon, and the lichened stile-boards, these staring vermilion words shone forth” (101) と語られるこの文字は輝きによって強調されるのである。「汝、眠ることなかれ」という文は意識を喪失させ、視線を逸らすことによって、Alec の支配から逃れていた彼女に強く響く。この光によって強調された文字と言葉によって、彼女は Alec と関係を持ったということ、身体は彼の手に掛かり蹂躪されたという事実を目を向けざるを得なくなってしまうのである。ここで改めて彼女は自分の体験した Alec との性的経験が当時の道徳上、好ましくないものであり、罪に値することを自覚させられるのである。文字を強調する光は彼女に Alec との関係を強制的に喚起させ、罪の意識に強く追いつ込む。加えて、ここで彼女がもう以前のような身体に対する無関心を決め込むことができなくなったことが決定的に示されているのである。

このように Tess は Alec との関係を通じて、それまで自覚していなかった身体的の存在や感覚を意識させられるようになる。Alec は身体的な接触や交際を通じて彼女の身体的な感覚を刺激し、覚醒させ、そうした身体的悦楽によって彼女を屈従させ支配しようとするのである。そのようにして、Tess を苛む身体的な感覚や快楽は光の描写によって暗示的に表され、彼女の周辺に現れる。光は身体的な情念や感覚の表象となり、Alec のこのような支配を暗示するものとして機能するのである。Tess はこれらに支配されることに恐怖と当惑、危機感を感じ、この支配に対して意識を身体から逸らし、魂を闇の中に沈めることによって抵抗する。彼による暴行という決定的

な場面においてはそうした彼女の意識は周囲の風景にも彼女を取り巻く闇という形で反映し、これは彼女の抵抗と自衛の意思の表象となるのである。彼による暴行後も同様に彼女は彼に迫られる時、その視線や意識を彼や自分の身体から逸らすことで僅かばかりの抵抗を継続して示すのである。終始彼女は意識を身体からそらし、闇の中へ意識を落とすことで彼女は彼の支配を脱し、自らの自律性を保とうとする。こうして Alec の支配を逃れる Tess だが、彼女の身体は Alec と関係を持ってしまったが故に、容易に以前と同じような心身の状態を保つことは困難となる。彼女の身体には忘れ難き性的な感覚や情念がその後も付きまとうこととなり、また同時にそれに対する強烈な罪の意識に取り付かれてしまうのである。以降、彼女にとって身体は罪の意識と葛藤を齎すものとなり彼女を苦しめるものとなってしまふのである。そして、そうした身体に対する葛藤はこの後出会う Angel との交遊の中でさらに顕著なものとなり、彼女を苦しめることとなるのである。

## 2. Angel—葛藤と共鳴の関係

### 2-1. Angel との精神的共鳴と理想化された女性像

先に見たように、Alec との生活、交遊を通して彼女は性経験及び男性によって齎される密かなる身体的快楽を彼女は知ってしまうこととなる。そしてそれは、同時に彼女に対し、自分の身体が既存の道徳観念からは逸脱した罪深き存在となったことを実感させることとなった。その結果、彼女はそれ以前と同じように暮らすことは困難となり、その生活を新たに始め直すために彼女は Talbothays という牧場で奉公人として仕事を始めることとなる。そこで彼女は Angel Clare という男性と出会い、彼との交流で彼女は新たな喜びと葛藤に苛まれることとなる。そのような彼女の内面の動向もまた光や闇を通して極めて視覚的に描かれる。

Angel はその性格、出自ともに Alec とは対照的である。Alec が放蕩を繰り返し、女性に対して、性的な欲望を露骨に示し、行動していたのに対して、彼は牧師の家系の出身であり、知的好奇心の旺盛な人間として描かれる。こ

のような Angel の姿は非常にその内面を反映した形で語られる。

Angel Clare rises out of the past not altogether as a distinct figure, but as an appreciative voice, a long regard of fixed, abstracted eyes, and a mobility of mouth somewhat too small and delicately lined for a man's, [...] enough to do away with any inference of indecision.

Nevertheless, something nebulous, preoccupied, vague, in his bearing and regard, marked him as one who probably had no very definite aim or concern about his material future. (147)

彼はかなり線の細いイメージであることがここで語られる。印象として、明確な姿 “a distinct figure” は残らず、その内面は現実的、物質的なものではなく何処か夢想、観念的、抽象的で不明瞭なものをみている曖昧模糊とした存在として描かれるのである。上記の彼の姿の描写はこうした特徴的な性格を良く反映したものとなっている。彼は物質的な欲望よりも精神的な充足、成功を志向する人物なのであり、近代的な哲学や社会学といった急進的な学問を身に付け、現状をより良くするための思索を巡らせる人物として描かれるのである。

このような思索的、夢想的な Angel はやはり夢想的な気質を持つ Tess と強い親和性を持ち、魂が共鳴するように惹かれ合う。彼らの出会いはそのような気質を良く反映したものとなっている。Angel はある朝、偶然 Tess の話し声を耳にし、その存在に惹かれ始める。その声は、読書と思索に勤しむ彼の想像力を刺激し、彼の強い関心を引き起こしてしまう。以下がその描写である。

For several days after Tess's arrival Clare, sitting abstractedly reading from some book, periodical, or piece of music just come by post, hardly noticed that she was present at the table. [...] he was ever in the habit of

neglecting the particulars of an outward scene for general impression. [...] One day, however, when he had been conning one of his music-scores, and by force of imagination was hearing the tune in his head, he lapsed into listlessness, and the music-sheet rolled to the hearth. (154)

Angel は外部の情景に関心を向けない。Tess を知る際にも、楽譜に目を通し、想像力によってその内面に流れる音楽に耳を傾けている。このような彼の内省を Tess の声が浸食する。Tess と他の女性達の会話は彼の耳に届く時、彼の内面に流れる音楽と混合し、美しい旋律となるのである。“The conversation at the table mixed in with his phantasmal orchestra till he thought: ‘What a fluty voice one of those milkmaids has! I suppose it is new one.’” (154) このように描写されるように、彼女の声は彼の関心を強く惹きつける。Alec とは対照的に、彼は物理的、身体的な接触なしに彼女の精神性に強く惹かれていくのである。

Angel と同じく、Tess もまた彼に惹かれていくこととなるが、その引き金となるのはやはり Angel と同じく音楽であり、やはり身体的な接触なしに二人の精神は接近していく。彼の豎琴の旋律が、先に見た Tess の声のように彼女を引き寄せるのである。この彼らの出会いの描写は非常に印象的な風景となっており、彼らの心理が如実に反映する。

It was typical summer evening in June, [...]. There was no distinction between near and far, and an auditor felt close to everything within the horizon. The soundlessness impressed her as a positive entity rather than as the mere negation of noise. It was broken by the strumming of strings. (157)

彼女は夏の夕暮れ時に静寂の風景を破る彼の豎琴の音を耳にする。その旋律を追うようにして彼女は彼のいる場所を目指して、農場の庭先を移動する。

音に近づく度に彼女の精神は高揚していく。これに続く描写はさらに彼女の精神を視覚的に体現するものとなっている。

The outskirts of the garden in which Tess found herself had been left uncultivated for some years, and was now damp and rank with juicy grass which sent up mist of pollen at a touch; and with tall blooming weeds emitting offensive smells—weeds whose red and yellow and purple hues formed a polychrome as dazzling as that of cultivated flower. She went stealthily as a cat through this profusion of growth, [...] thus she drew quite near to Clare, still unobserved to him. (158)

Tess は豎琴の音色に惹かれて、庭を通る。彼女の体が周囲に触れると、草木の花粉が周囲に霧散“mist of pollen”する。そしてそれに続いて、色鮮やかな花の多彩色のイメージが登場するのである。このような周囲の風景は高揚する彼女の精神を体現した描写であるといえる。彼女が登場するこの夕暮れの空間は、以前彼女が身体と精神の乖離を体験した星空の瞬く早朝と類似した環境でもある。僅かな光とそれを覆う薄闇に満たされているという点において両者は近似しているのである。それを示すようにこの時の彼女の様子は“*There was no distinction between near and far, and an auditor felt close to everything within the horizon*”という語り手の言葉に暗示されている。この空間でもかつてのように彼女の内面的な感性は刺激され、彼女は遠近の感覚を失い、あたかも、地平線の向こうへ飛び立てるかのような感覚に襲われるのである。そのような空間に流れる Angel の音楽はこれをさらに加速させる。さらにこの後の Tess の様子は、*Tess was conscious of neither time nor space. The exaltation which she had described as being producible at will by gazing star, came now without any determination of hers*” (158) と語られ、やはりこの夕暮れの情景は以前の馬車の事故の夜明け前の状況と同じく彼女の夢を誘うものであり、ここでの彼女の精神的高揚、一時的な肉体の忘却を示

すものなのである。そうして、彼女の精神は罪の意識を想起させる肉体を忘却し、Angel の精神と共鳴して、彼へと引き寄せられていく。

こうして互いに夢想的な精神を持つ彼らは共鳴し、親密な関係となり、逢瀬を重ねて行くこととなる。この逢瀬の場もまた幻想的な空間で展開するが、それは次第に Angel の Tess に対する一方的な強い憧憬や敬意を反映したものととなって現れる。Tess と共鳴した彼はそうした場所で彼女に強い欲望を向けるのである。

They met continually; they could not help it. They met daily in that strange and solemn interval, the twilight of the morning in the violet and dawn; [...].

Being so often — possibly not always by chance — the first person to get up at the daily-house, they seemed to themselves the first persons up of all the world. [...] the spectral, half-compounded, aqueous light which pervade the open mead, impressed them with a feeling of isolation, as if they were Adam and Eve. (166-167)

“the twilight of the morning” とあるように、彼らが出会うのはやはり夜明け前の薄闇と霧の時間である。先の夕暮れの風景と同様に夢を誘う幻想的な空間となっている。人物の姿は決してここでは明確に現れることなく微妙な影や闇の干渉を伴い、非現実的な形で現れる。そうした空間で継続して、Tess は想像力を刺激され、精神的な高揚感に耽溺するのだが、その一方で特に Angel の理想的願望が強く空間に反映され、現れ始め、彼女自身もその中に取り込まれる。

The mixed, singular, luminous gloom in which they walked along together to the spot where the cows lay, often made him think of the Resurrection hour. He little thought that the Magdalen might be at his side. Whilst all the



landscape was in neutral shade his companion's face, which was focus of his eyes, rising above the mist stratum, seemed to have a sort of phosphorescence upon it. She looked ghostly, as if she were merely a soul at large. (167)

この光と闇の混合“luminous gloom”の中で、Angelの目に映る Tess はただの女性ではなく、霊的、神秘的な存在として現れてくる。“She looked ghostly, as if she were merely a soul at large”と語られるように、ここでは Tess は肉体を脱した、精神的な存在として彼に捉えられる。“Magdalen”と聖人の名で表されるように、極めて神聖な存在へと彼女は変貌させられるのである。これは Angel の Tess に対する神格化とも言うべきものであり、こうした彼の女性にたいする願望が強く反映した描写と言えるであろう。

このように Angel は Tess の精神に共鳴し、彼女を崇高な存在として崇める。そして、彼はさらに彼女に自分のパートナーとなることを求めるようになり、それに伴い、彼は彼女とさらに交流を深め、同時に啓蒙しようとする。こうした彼らの関係は、聖書のエデンの Adam と Eve のそれを思わせるものとして描かれる。(彼らの逢瀬の様子は実際に“as if they were Adam and Eve” (167) と語られる。)しかし、ここで彼らは必ずしも、正確にこの創世記の Adam と Eve の役割を担っていないのである。その役割はここでは逆転する。この点を Rosemarie Morgan は指摘し、“the Edenic roles of the central character are inverted. It is Eve who is lured ‘like a fascinated bird’ and Adam who lures”<sup>13</sup> と述べる。元来の創世記に於いては、知恵の実を口にし、それを Adam に勧め、誘惑する役割を負うのは Eve である。しかし、ここではその役割は転倒しているのである。男性であり、Adam たる Angel がここでは Eve である Tess を誘惑するのである。

ここで音楽をきっかけに Tess を惹きつける Angel の姿はまさにそのような誘惑を物語る。ここで彼は Eve が Adam を誘惑するかのように彼女を惹きつけ、自分の持つ知識や哲学といった観念の世界へと誘うのである。彼は

自分と共鳴する Tess を精神的に成熟し、洗練された理想的な女性であると認識し、彼女を自分と同じ文化、階級の中へと取り込もうとする。彼は彼女のそうした潜在的な能力に期待し、自分の理想的な妻にしようとするのである。

この後も彼は“Would you like to take up any course of study—history, for example?” (162) と発言し、彼女に歴史などの教養を身に付けさせようと持ちかける。しかし、Tess は知りたいことはあるものの、彼が彼女に勧めるような教養とは違くと、彼の誘いを拒否する。それが以下の会話である。

‘What, really, then, you don’t want to learn anything?’

‘I shouldn’t mind learning why—why the sun shines on the just and on the unjust alike,’ she answered, with a slight quaver in her voice. ‘But that is what books will not tell me.’ (162)

Angel は彼女に学ぶことを望まないのかと問う。それに対して Tess は自分の知りたいこととは何故、太陽は必要なものにも不必要なものにも区別なく降り注いでしまうのかということであり、それは一般的な教養たる書物が決して教えてはくれないことだと答える。ここでの彼女の発言はこれまでの彼女の人生経験を色濃く反映したものであるといえる。ここでの彼女の太陽に対する言及は非常に暗示的である。太陽やその陽光に照らされる身体は、既に見たように彼女に対する男性の支配と身体的な情念を暗示する表象であった。このような彼女の言及はそうした情念が彼女の中で未だに燻り、彼女を苛んでいることが示唆され、自分に意思ではどうにもならないこうしたものに対する苦悩を強く示すものである。この彼女の苦悩は Angel の知性や教養では容易に解消可能なものではない。ここで彼女は改めて、その身体とそのうちに眠る情念の存在を意識し、苦悩しているのである。それ故に彼女は彼のこうした誘いを拒否するのである。Tess はこうした内なる情念と身体故に Angel の望むような女性とはなりえない。そのように彼女は思い悩み、

こうした彼の誘いを拒むのである。

このような拒絶は何気ない日常的な会話の中にも継続的に現れる。彼は逢瀬の時に戯れに、早朝の明暗の効果によって神秘的な姿となった Tess を “Artemis”, “Demeter” と呼ぶ<sup>14</sup>が、彼女はそれを受け入れない。Alec との経験を経た Tess にとっては、彼女を神格化するような呼称は耐え難いものであり、拒絶する。彼女はこのような名で呼ぶ彼に対して、自分はただの Tess であり、自分の名を正確に呼んで欲しいと彼に主張する。彼女は自分の身体を意識し、自分がそのような神聖な存在ではないと考え、彼にこのように求めるのである。

このような態度を Tess が示す時、彼女を取り巻く周囲の風景もまた、彼女の意思を暗示するかのように変化する。

Then it would grow lighter, and her feature would become simply feminine; they had changed from those of a divinity who could confer bliss to those of a being who crave it. [...] When the day grew quite strong and commonplace these dried off her; moreover, Tess then lost her strange and ethereal beauty; her teeth, lips, and eyes scintillated in the sunbeams, and she was again the dazzlingly fair dairymaid only, who had to hold her own against the other women of the world. (168-169)

Tess が神格化に拒否を示すと、それと並行するように彼らのいた空間は変化する。夜明け前の薄闇は太陽の上昇と共に光によって侵食され、辺りの明度は上昇していく。それに従って、神掛って見えた Tess の姿も一般的な女性のそれへと戻っていくのである。ここでは彼女は霊的な姿から肉体をもった一人の女性へと回帰するのである。この変化は理想的な女性像を求める Angel を無意識に拒絶したことを示し、また彼女自身がその身体を再び意識していることを示している。このように Tess は Angel と精神的な面で強く共鳴するものの、自らの過去と、内に秘める身体的な感覚や情欲、それに対

する罪悪感の為に、観念的で保守的な女性観を求める彼を素直に受け入れることができず、拒絶してしまう。彼女の身体は彼女の精神を強い葛藤に陥れるのである。

## 2-2. 身体的欲望の干渉と葛藤

Tess は Angel による理想化や啓蒙を拒絶するものの、彼女はやはりこの男性に惹かれていってしまう。彼女は Angel との交際を続けるうちに、Alec との交流、経験のうちに覚醒させられた肉体的な悦楽に強く干渉され、身体的接触に対する渴望が湧き出てくるのである。彼女のこの身体的な快楽や接触を求める願望は、彼女の周囲の近しい同僚の女性たちとの接触によって、強く触発され、顕在化する。Angel Clare に同じく想いを寄せる女性は Izz, Marian, Retty の三人である。彼女らは Tess と Angel の関係を知りながらも彼に密かに想いを寄せる。彼女たちの Angel に対する情念は肉体的な接触を強く意識したものであり、それは以下のような彼女達の描写で暗示される。

Tess usually accompanied her fellows upstairs. To-night, however, she was the first to go to their common chamber; and she had dozed when the other girls came in. She saw them undressing in the orange light of the vanished sun, which flushed their forms with its colour; she dozed again, but she was reawakened by their voices, and quietly turned her eyes towards them.  
(173)

上の引用は Tess が偶然この三人の女性達と共用の部屋で居合わせた際の描写である。Tess は彼女達があられもない姿“undressing”でいる姿を目にする。ここでこの女性達の身体は太陽の光“the orange light of the vanished sun”によって強調されて、彼女の眼前に強い存在感を持って迫ってくる。この後、三人は偶然外に通りがかった Angel に視線を向けるが、その際は

さらにこの身体性は強調される。

Neither of her three chamber-companions had got into bed. They were standing in a group, in their nightgowns, barefooted, at the window, the last red rays of the west still warming their faces and necks, and the walls around them. All were watching somebody in the garden with deep interest, their three faces close together: a jovial and round one, a pale one with dark hair, and a fair one whose tresses were auburn. (174)

彼女達は庭を偶然 Angel が通り掛かると、挙って彼を見ようと窓から身を乗り出す。その際の女性達の姿はやはり太陽の光“red rays of the west”によって照らされ、その身体がさらに視覚的に強調されるのである。陽光によって照らされ、“barefooted”“necks”“faces”といった露出した煽情的な身体が存在が強調されることによって、そこから彼女たちの身体的な情念が暗示されるのである。この様子は先ほど庭先で Angel の豎琴の音で誘惑される Tess とは対照的でもある。Tess が精神的な次元において彼に惹かれていったのに対して、この女性達は肉体的な接触やそれによる悦楽を強く意識して、彼を求めているのである。それを示すように、彼女達の内一人の Izz は明確に肉体的な接触を求めていることが語られる。“the shade of his face came upon the wall behind, close to Izz, who was standing there filling a vat. She put her mouth against the wall and kissed the shade of his mouth;” (174) と語られ、Izz は Angel の影に密かに口付けをしようとしていたことが表されるのである。このようにこの女性達は身体的な快楽や欲望に基いて行動していることが示される。彼女達のそうした姿はさらに“*They writhed feverishly under the oppressiveness of an emotion thrust on them by cruel Nature’s law*” (187) とその様子は描かれるが、ここで使われる“*Nature’s law*”という言葉もやはり明確に女性達が持つ自然的、生物的な欲求、即ち、性的な欲求を含む身体的な欲望、情念を示していると言える。

このような女性達の影響を Tess は大きく被る。彼女らと行動を共にする内に、Tess の秘められた肉体的な欲求 “Nature’s law” を彼女は再び意識するようになるのである。この女性達の Angel に対する好意は Tess の彼に対する感情を強く刺激し、彼女の内に秘める情念を強く誘発するのである。<sup>15</sup> Tess のこのような欲求が最も顕著に現れるのが、Angel が Tess を含める女性達を抱きかかえて、川を渡る場面である。Izz, Retty, Marian の三人は増水によって渡れなくなった教会への道をそれぞれ、彼に抱かれて渡る。それぞれ歓喜の表情を示すが、Tess もまた当惑しながらも示すのである。

It was now her turn. She was embarrassed to discover that excitement at the proximity of Mr Clare’s breath and eyes, which she had contemned in her companions, was intensified in herself; as if fearful of betraying her secret she paltered with him at the last moment. (184)

Tess は彼に抱きかかえられると、彼の息遣いや目といった今まで意識しなかった肉体的な存在が強く迫ってくる。ここから、彼女は自分もまた上記の女性達と同じく彼に対して肉体的な情念を抱いていることを自覚することとなる。彼の抱擁をここで受け入れることによって彼女の情念は最高潮に高まる。彼女もまたあの女性達と同様の情念をここで表出させるのである。以降 Tess は彼の身体を強く意識し、欲望を向けるようになる。

こうして、彼女はついに自分の欲求に従って彼を求め、ついに結婚することを決めてしまう。結婚が決まってからも Tess は身体的な接触を無意識的に求めてしまうのである。身体的に彼と接触するたびに罪の意識や負い目を感じながらも彼女は本能的ともいえる喜びを感じてしまう。例えば、それは次のように描写されている。

The place having been rather hastily prepared for them they washed their hands in one basin. Clare touched hers under the water.

‘Which are my fingers and which are yours?’ he said, looking up. ‘They are very much mixed.’

‘They are all yours,’ said she, very prettily, and endeavoured to be gayer that she was. (277)

二人は蜜月の時を d'Urberville 家縁の館で偶然にも過ごすことになる。以上はその場所に用意された部屋で二人がひとつの桶で同時に手を洗う様子である。彼らの手と手は水中で重なり合う。それによってやはり彼女は無上の喜びを感じてしまうのである。ここでも先の Angel との抱擁の描写と動揺の感情と感覚が彼女に起こっているといえよう。それを示すようにこの描写に連動して、陽光の様子がこの場面には挿入される。

The sun was so low on that short last afternoon of the year that it shone in through a small opening and formed a golden staff which stretched across her skirt, where it made a spot like a paint-mark set upon her. (277)

手が触れ合い、感情高ぶる Tess の身体に暮れかけた陽光が差し込む。この光は彼女の身体を強調し、そこにやはり内在する彼女の快楽を暗示するのである。また、ここで彼女の身体を照らす陽光は“a paint-mark”と語られ、その様子は彼女をかつて苛んだ壁にペンキで書かれた標語も想起させる。つまり、彼女が快楽の一方で感じる罪の意識も示唆されるのである。

Angel もまたこのような彼女の美しさに圧倒されてしまう。これまでは、彼女の精神的な気高さや美しさに惹かれていた彼ではあるが、ここで彼の眼前に改めて肉体を持った存在としての彼女がその存在感を増してくる。

As everybody knows, fine feather make fine birds; a peasants girl but very moderately prepossessing to the causal observer in her simple condition and attire, will bloom as an amazing beauty if clothed as a woman of

fashion with the aids that art can render; [...] He had never till now estimated the artistic excellence of Tess's limbs and features. (281)

二人の下に Angel の両親から、花嫁のための装飾具が贈られる。以上の引用は、それらを彼が Tess に身に付けさせた際の様子である。煌びやかな装身具と服装は彼女の美しさを強く引き立てる。これによって彼は初めてその身体的な美と魅力に気付かされるのである。だが、それは彼を Tess と同じ葛藤へと追い込むこととなる。

先に見たように、彼は既存の女性観でのみで彼女を捉える。当時、女性は身体的な性や性的欲望を持たない存在であるべきと考えられていたのであるが、彼は依然としてこのような見識に捕らわれており、彼女の性体験が告白されると、露骨な嫌悪を示す。この告白以後、彼の眼前に一層強く圧倒的な性的魅力と活力を持った存在として現れて来るのである。既存の道徳体系に強く縛られ、性体験を持たない彼は、ここで男性としての自意識を強く彼女によって揺さぶられてしまうのである。既に見たように、Alec も彼女によって男性としての自意識を揺さぶられたが、Angel もまた彼とは異なった観点で男性としての自意識を動揺させられるのである。このような彼の動揺を Nemesvari はやはり指摘し、次のように説明する。

After Tess confesses her relationship with Alec to Angel, he decides that she is 'dead' to him [...]. His constant refrain that '[y]ou were one person; now you are another', that 'the woman I have been loving is not you', and that she is 'not the same. No: not the same', is of course centred on a sexual experience he did not know she possessed. Almost equally important, however, is the fact that that experience was derived through a man who threatens not only Angel's sole possession of Tess, but also his sense of masculinity. [...] we can assume that it describes Alec's character, and his caddishly aggressive sensuality is thus brought directly into conflict with



Angel's gentlemanly self-control.<sup>16</sup>

Angel が今まで構築してきた Tess 像はこの彼女の告白によって見事に崩壊する。彼は Tess の性体験の告白を通して、彼女と関係を持った Alec の存在とその攻撃的、衝動的な性格を強く感知する。ここでは Tess と共にこれが Angel の自意識を強く動揺させる原因となる。彼とは全く対照的な道徳観の下に生きてきた Angel には、このような男性の存在と彼と関係を持った Tess の存在は、彼の男性として、夫としての価値観や意識を大きく動揺させるものとして迫ってくるのである。Angel は彼らの持つ肉体的な悦楽や感覚の体験によって、自分の力、能力の欠落を強く認識させられることとなるのである。

このような彼女の告白の結果、Angel にとって Tess は扇情的な身体を持つ罪深い誘惑者のような存在になり、同時に自分の欠陥を実感させる忌むべき存在となってしまう。それが明確に示されるのが、彼らが滞在したこの屋敷に飾られた D'Urberville 家の祖先の夫人の絵に対する彼の態度である。Angel は Tess の告白を聞いた後、彼女の面影を持つこの絵に恐怖と動揺を覚えてしまうのである。

In the candlelight the painting was more than unpleasant. Sinister design lurked in the woman's features, a concentrated purpose of revenge on the other sex—so it seemed to him then. The Caroline bodice of the portrait was low—precisely as Tess's had been when he tucked it in to show the necklace; and again he experienced the distressing sensation of a resemblance between them. (300)

d'Urberville 家の夫人の絵はキャンドルの光に照らされて、彼の眼前に現れる。光に照らされることによって、改めてこの夫人と Tess の酷似が強調されて現れてくるのである。そして、その肉体は “a concentrated purpose of

revenge on the other sex” とある通り、圧倒的で暴力的とも言える性的なイメージと肉感を持ち男性に迫ってくるように描かれ、Angel の持つ道徳観や女性観に挑戦的な存在として語られる。Tess を取り巻くこのような身体と性のイメージに彼は恐怖を覚え、拒否感を強めさせてしまう。こうした暴力的なまでにその存在感を強める性によって圧倒される彼の姿は、まさにかつて Car と Alec によって翻弄される Tess と類似する。彼も Tess と同じ葛藤を経験しているということがここで表されているとあって良いであろう。

だが Angel の中に渦巻く彼女に対する情念は、それでも尚、抗い難いものであり、彼はそれを完全に捨て去ることが出来ずに葛藤する。それが顕著に現れるのが、彼が夢遊病者のように無意識に歩く場面である。ここでの彼は無意識的に彼女の身体に接触しようとする。

After fixedly regarding her for some moments with the same gaze of unmeasurable woe he bent lower, enclosed her in his arms, and rolled her in the sheet as in a shroud. Then lifting her from the bed with as much respect as one would show to a dead body in such circumstances, [...]. (316)

以上の描写は彼が夜に眠りながら歩いて、Tess の下にやって来た際の様子である。彼はここでまるで葬儀で死者の体を扱うかのように、彼女に触れて抱き寄せる。このような彼の行為は彼の無意識、深層心理が暗示された描写と言われる。Tony Tanner はこの無意識に行なわれるこの葬儀のような行為に対して、彼の性意識や衝動との関係性を指摘する。“He encoffins the sexual instinct, then lies down beside Tess. The deepest inclinations of his psyche, [...] have been revealed”<sup>17</sup> と彼は述べる。つまり、葬儀のように Tess を柩に納める行為は、彼の女性に対する性的欲望の抑圧を暗示しているのである。確かに、このような行動からは、Tess と同時に彼女に対する彼の欲望も葬り去ってしまおうという彼の心理的な願望が読み取れる。しかし、そ

のような抑圧的な感情と同時に Angel は抗い難い性衝動も感じており、この一連の夢遊病の場面の抱擁や身体的接触といった彼の行為からはそれらも暗示されるのである。彼は Tess に対する欲求や情動を葬ろうとする一方で、無意識的に彼女の美しい身体に抗い難い魅力を感じているのである。

すでに見たように、彼に抱擁される Tess もまた、彼と同じく身体に対して、強い葛藤を抱く。彼女は身体的な接触にやはり至高の喜びを感じながらも、彼の精神を苦しめてしまう自分の身体に対する罪悪感を同時に強く感じるのである。こうした身体に対する両義的な感情と葛藤は、彼女を Angel との交遊の中で常に苦しめていたものであるが、この夢遊病患者となった Angel に抱かれる中で、彼女はその苦しみを解消し得る道を見出す。それは以下のような印象的な場面の中で現れる。

The swift stream raced and gyrated under them, tossing, distorting, and splitting the moon's reflected face. Spots of froth travelled past, and intercepted weeds waved behind the piles. If they could both fall together into the current now, their arms would be so tightly clasped together that they could not be saved; they would go out of the world almost painlessly, and there would be no more reproach to her, or to him for marrying her. (318)

Tess は眠りながら徘徊する Angel に抱かれて、僅かな月光のみが照らす闇夜の中、河を渡る。Angel は無意識的に、かつて Tess に無上の喜びを齎した渡河の場面を再現するのだが、ここで Tess はこのまま彼の腕に抱かれながら、入水し、自らの生に終止符を打とうという思いに衝動的に駆られる。つまり、葛藤の根本的な原因となっている身体の破壊の衝動に彼女は取り付かれるのである。ここで人物の身体は夜の闇の中に包まれているが、こうした闇は彼女の破壊衝動を反映し、暗示していると考えられる。

しかし、彼女はここでそれを実行はせず、思いとどまる。彼女は肉体に対する破壊衝動を感じながらも、想い人の腕に抱かれる身体的悦楽も確実に感

じているのである。それ故に、容易にこれを放棄し、自害することはできないのである。闇夜の中、水面に反射する淡い月光が身体を照らしているが、淡い光は身体が存在を浮上させ、やはり彼女がそれに関して執着を捨てきれないことを示している。ここでは闇と光が混沌として交じり合うかのような空間となっており、彼女の身体に対する両義的な感情が視覚的に示唆されているのである。

だが、彼女の身体に対する破壊願望や憎しみは時を経るごとに募り、強まって行く。彼女は過去の告白をきっかけに Angel と離別し、様々な不幸な経験を経て Alec の下へ戻ることとなるが、この男の下で彼女の罪の意識と身体に対する破壊的な衝動は顕著に現れる。彼女は愛人として Alec と共に過ごす、その最中に Tess との離別後、南米へと出かけた Angel が帰還したという事実を知る。その時の彼女の言葉と行動は罪悪感と破壊衝動が入り混じったものとなっている。

‘And my dear, dear husband came home to me... and I did not know it! [...] you said my husband would never come back—never; and you taunted me, and said what a simpleton I was to expect him!... And at last I believed you and gave way!... And then he came back! Now he is gone. Gone a second time, and I have lost him now for ever... and he will not love me the littlest bit ever any more—only hate me!... O yes, I have lost him now—again because of—you!’ In writhing, with her head on the chair, she turned her face towards the door, and Mrs. Brooks could see the pain upon it; and that her lips were bleeding from the clench of her teeth upon them, and lashes of her closed eyes stuck in wet tags to her cheeks. (486-487)

Tess は事実を知り、Angel を裏切って過去の男性の愛人に甘んじるという自分の状況に対する罪悪感と、自分を誘惑した Alec に対する憎しみに苦悶の言葉を発する。そして悔恨と憤りの入り混じった想いに連動して、彼女

は無意識的に自らの歯で唇を噛んでしまう。このような衝動的に行なわれる自傷行為は Tess の身体に対する無意識的な破壊衝動を示している。彼女は罪悪感の根源である身体に対する嫌悪と憎悪という感情を無意識的に発露させているのである。しかし、両義的な感情故に、Tess は直接的に死への道を進むことはできないのである。この後、彼女は衝動的に Alec を殺害してしまうのだが、この唐突に行われる衝撃的な行為は Tess の行き場のない自らの身体に対する憎しみと破壊衝動を Alec にぶつけたものと考えられないだろうか。彼女は自らの身体の代替として、彼の身体を衝動的に破壊したのである。そうした繋がりを示すように、ここで流される彼女の唇の流血は、Alec の死因となる傷とアナロジーを成しているように思われる。

しかし、Tess の精神的葛藤は決して解消されることはない。依然として彼女の罪の意識の根源たる身体は存在し、それ無しでは Angel と会うことができない。故に彼女は憎しみながらも、それを捨てられず、ジレンマは継続するのである。だが、Angel と再会し、彼と共に在る為に Alec を殺害した Tess は二人で周囲の目をかわしながら逃避行に出る中で、苦しみに対する窮余の策を見出す。Tess はかつて彼女の想像力を刺激し、身体の忘却を促した暗黒に再び救済の価値を見出すのである。暗黒の空間にその身体を置き、それに包まれることで彼女はそこに安息を見出す。暗黒は彼女の身体を抱擁し、視覚的に隠蔽する。そして同時に彼女の身体的感覚も限りなく減少させるのである。彼女は生きながらにして身体的な五感を最低限に減退させ、限りなく死に近付こうとする。彼女は一時的に生きながらにして、肉体の苦痛からも解放されようとする。そうした彼女の安息の様子は以下のように描かれる。

They remained in great quietness till the caretaker should have come to shut the windows: as a precaution, putting themselves in total darkness by barring the shutters as before, lest the woman should open the door of their chamber for any casual reason. [...] Then Clare again stole a chink of light

from the window, and they shared another meal, till by-and-by they were enveloped in the shades of night which they had no candle to disperse. (496)

彼らは逃避行の夜をうらぶれた家屋で過ごすが、ここで、彼らは闇に包まれる (“they were enveloped in shades of nights”) と同時に、静けさ (“great quietness”) の中に包まれる。こうした環境に身を横たえる Tess の視覚聴覚をはじめとする五感は、限りなく死に近づいたかのように、閉ざされる。それによって彼女はここで擬似的に死を体感すると同時に、僅かばかりに残った身体的な感覚を用いて、想い人との逢瀬に耽溺するのである。

このような闇はさらに続いて物語の終幕にも描写される。彼らは最終的にストーンヘンジの遺跡に辿り付くが、ここでも上記のような闇は継続して現れる。巨大な石柱が屹立する空間は、“At an indefinite height overhead something made the black sky blacker, which had semblance of a vast architrave uniting the pillars horizontally” (501) と描写され、Tess は巨大な暗黒の空間に包みこまれる。その周囲の石柱もまた、陽光を遮るかのように聳え立ち、その巨大さで彼女を守るかのようにも語られるのである (“The eastward pillars and their architraves stood up blackly against the light” (504))。空間はここで完全に周囲の目からは隔絶され、暗黒が満たす空間に Tess と Angel は包まれる。これによって、先の描写と同様にやはり静寂と闇の中で、Tess は肉体の感覚を最低限に抑え、隠しながら Angel との安らぎに満ちた時間を過ごすのである。暗黒は彼女の身体の抑圧による一時的な安息感を示唆するのである。

しかし、こうした安息の空間は飽くまでも一時的な窮余の策として彼女が見出したものであり、決して永続する安息ではない。時間の経過に従い、次第に陽光が進入し、Tess の姿を可視化させてしまう。これにより夢想的な安息の空間は不可避免的に消失してしまうのである。闇に対する光の干渉は、彼女が最終的に見出した安息は一時的なものであり、彼女は生きている限り身体に不可避免的に捕らわれ、精神との間で葛藤に苛まれなくてはならないと

いうことを示唆していると言える。この陽光の描写の後、直接的な言明はないものの、彼女は陽光と共にやって来たと思われる警吏たちに抵抗なく捉えられ、処刑台に消える。こうした彼女の行動は、生きている限り苛まれる身体の苦痛を予期していたが故のものと考えられる。最終的に彼女にとっては、死こそが肉体から解放される究極的な術となり、それを自ら選ぶこととなるのである。

彼女の死、そしてそれに至るまでの彼女の葛藤は、彼女の精神を最後の時まで苛んだ女性の性の在り方を過度に束縛し抑圧する当時の道徳観念の不条理さを強く訴えているといえるだろう。Hardy は彼女の性に関する葛藤を交錯する光と闇の視覚的比喩によって描写することで、こうした不条理を読者に強く印象付け、社会に訴えようとしていたのではないだろうか。

## お わ り に

Tess の周辺には彼女の身体に関する意識の変化と葛藤に伴って光と闇が効果的に現れ、その心情を視覚的に暗示する。Tess は Alec の暴行がきっかけとなり、自分の意思とは裏腹に身体的な欲望、情動に覚醒させられてしまう。彼女を照らす光は性の存在とそれに対する情念を強く表象する。強い光によって彼女や周辺の女性の身体が存在が強く示され、彼女の秘めたる情動が暗示されるのである。

しかし、当時の女性に関する道徳と照らし合わせると、これは許されざることであった。故に Tess は不道徳な性的経験と情動を内に秘めてしまった自らの身体に強い罪悪感を持つ。そして、それは Angel との交流、結婚を経て、大きく肥大化して彼女の精神を苛んでしまうこととなるのである。このような罪悪感を消し去る為に Tess は自らの身体の破壊、即ち死を志向するようになる。しかし、異性との身体的接触、交遊による悦楽を知る彼女は容易に身体を破壊することができない。破壊衝動を身体に向けながらも、こうした忘れ難い悦楽を知るが故に、彼女は破壊を思い止まらざるを得なくなってしまうのである。

そうした葛藤を解消するために彼女は闇の空間を志向する。暗黒の空間にその身体を抱合されることによって、彼女は一時的に身体が存在を不可視化し、身体的感覚を減退させることで、肉体を忘却して解放の安らぎを得るのである。言わば、これは擬似的な死の体験である。暗闇で身体を視覚的に消滅させることによって、彼女は精神だけの存在になったかのように肉体を忘れ、想い人と安息の時を過ごすのである。闇はそれまでも、彼女の想像力を刺激し、意識を身体から離して、夢想へと牽引するものであったが、身体に関する苦痛と葛藤の経験を経て、彼女は再び価値を見出すのである。しかし、こうした闇の空間で得る安息は所詮、一時的な救済に過ぎず、決して永続的なものとはなり得ない。彼女はこの世にある限りその身に秘める情動に苛まれ、葛藤は必然的に付き纏うのである。そのために彼女は究極的には死を希求、Angel との別離を受け入れる。そして最終的に死を受け入れ、完全に肉体を消滅させるのである。彼女が性や身体に関する葛藤を経て見出した究極の安息は、死そのものであったのであったと言えよう。

尚、こうした暗黒や死のイメージへの志向は、Hardy が *The Return of the Native* で予見した人間の美意識の発展を体現したものと言える。彼は“human souls may find themselves in closer and closer harmony with external things wearing a sombreness distasteful to our race when it was young”<sup>18</sup> と作品で表し、人間の感性は成熟に従い、暗く荒涼とした風景に強い親和性を抱くようになるということを示している。Tess が身体に対する意識の変遷を通じて辿り着いた暗黒の空間への親和性や死への志向もこのような美意識と繋がるものではないだろうか。

このように作品で交錯する光と闇は彼女の身体に対する絶えざる葛藤とそこから導きだされる彼女の身体意識を視覚的に示しているのである。この葛藤の末に彼女は死へと向かうことになるが、このような描写を通して Hardy は理不尽な社会通念や規範によって引き起こされた女性の苦悩を指し示し、女性の自然な感情や感性に対する不当な抑圧を糾弾したのではないだろうか。彼は Tess に不当に罪の烙印を押す当時の道徳観念が人間の在るべき姿を阻



害するものと考え、Tess が規範から逸脱し、葛藤する姿を効果的に描くことによって、女性の真の在り方を問うたのである。

注

1. Thomas Hardy. *Tess of the d'Urbervilles*. (New York: AMS Press, 1984.)  
本稿における引用は全てこの版からによるものである。
2. Vicotoria 朝時代において女性は信仰心や精神性、高潔さに満ちた存在として論じられ考えられることが多くあった。この点に関して、Walter. E. Houghton は女性は“creature more like angels than human being”であったと指摘する。このイメージに関して彼はさらに“an image wonderfully calculated not only to dissociate love from sex, but to turn love into worship, and worship of purity” (Walter. E. Houghton *Victorian Frame of Mind 1830-1870*, New Haven: Yale UP, 1985. p. 355) と述べ、女性に対して根強い精神性に対する信仰があったことを指摘する。
3. J. B. Bullen. *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*. (Oxford: Oxford UP, 1986.) p. 192.
4. Thomas Hardy. *The Life and Work of Thomas Hardy*, (London: Macmillan, 1984.) p. 201.
5. Mary Jacobus. “Tess: The Making of a Pure Woman” in *Thomas Hardy's Tess of the d'Urbervilles*. Ed Harold Bloom. (New York: Chelsea House Publisher, 1987.) p. 50.
6. Peter. J. Casagrande. *Tess of the d'Urbervilles: Unorthodox Beauty*, (New York: Twayne Publisher, 1992.) pp. 51-52.
7. Peter. J. Casagrande. *Tess of the d'Urbervilles: Unorthodox Beauty*, (New York: Twayne Publisher, 1992.) p. 52.
8. Elizabeth Langland. *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culuture*, (Ithaca and London: Cornel UP, 1995.) p. 37
9. Angelique. Richardson “Hardy and Biology” in *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. (London: Macmillan, 2002.) p. 158.
10. ミシェル・フィエ 武藤剛史訳『キリスト教シンボル事典』(東京:白水社 2006.) pp. 151-152
11. Rosemarie Morgan. *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy*, (London: Routledge, 1991.) p. 96

12. Richard Nemesvari. “‘The Things must be Male, we suppose’: Erotic Triangles and Masculine Identity in Tess of the d’Urbervilles and Melville’s Billy Buds” in *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. (London: Macmillan, 2002.) pp. 94-95
13. Rosemarie Morgan. *Women and Sexuality in the novels of Thomas Hardy*. (London: Routledge, 1991.) p. 96
14. 神話の女神のイメージによって呼ぶ行為に関して, Richard Nemesvari は, “They also serve to establish his superiority of learning over Tess, whose failure to understand his allusion helps maintain the class distance between them [...]” (Richard Nemesvari “‘The Things must be Male, we suppose’: Erotic Triangles and Masculine Identity in *Tess of the d’Urbervilles* and Melville’s *Billy Buds*” in *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. London: Macmillan, 2002. p. 98) と述べ, 彼の古典の教養への言及と Tess のそれに関する無理解は Angel の知的な領域における優越性と二人に間に横たわる階級の差を暗示していることを指摘する。つまりここでは Angel が圧倒的な優越性を以て彼女を捉えようとする傲慢さが窺えるのである。
15. 鈴木淳もまた「テスのエンジェルへの愛情が他の女性たちがエンジェルを愛しているために刺激され, いっそう強くなっていた」(日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌: 日本ハーディ協会創立五〇周年記念論集』東京 音羽書房鶴見書店 2007. p. 312) という点を指摘している。そして, また同時にこの情念に満ちた3人の女性の存在は Tess の内部で渦巻く性的な欲求, 情念の存在を強く暗示することを指摘している。
16. Richard Nemesvari. “‘The Things must be Male, we suppose’: Erotic Triangles and Masculine Identity in *Tess of the d’Urbervilles* and Melville’s *Billy Buds*” in *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. (London: Macmillan, 2002.) p. 103.
17. Tony Tanner. “Colour and Movement in Hardy’s *Tess of the d’Urbervilles*” *Thomas Hardy’s Tess of the d’Urbervilles*. Ed Harold Bloom. (New York: Chelsea House Publisher, 1987.) p. 12.
18. Thomas Hardy. *The Return of the Native*. (New York: Norton, 1969.) p. 3.

参 考 文 献

Bloom, Harold. ed. *Thomas Hardy’s Tess of the d’Urbervilles*, New York: Chelsea House

- Publisher, 1987.
- Bullen, J. B. *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*.  
Oxford: Oxford UP, 1986.
- Casagrande, Peter. J. *Tess of the d'Urbervilles: Unorthodox Beauty*, New York: Twayne  
Publisher, 1992
- Hardy, Thomas. *The Life and Work of Thomas Hardy*, London: Macmillan, 1984.
- . *The Return of the Native*. New York: Norton, 1969.
- . *Tess of the d'Urbervilles*, New York: AMS Press, 1984.
- Houghton, Walter. E. *Victorian Frame of Mind 1830-1870*, New Haven: Yale UP, 1985.
- Langland, Elizabeth. *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in  
Victorian Cululture*, Ithaca and London: Cornel UP, 1995.
- Mallett, Philip. ed. *Thomas Hardy: Text and Contexts*, London: Macmillan, 2002.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography*, Oxford: Oxford UP, 1982.
- Morgan, Rosemarie. *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy*, London:  
Routledge, 1991.
- 日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌：日本ハーディ協会創立五〇周年記念  
論集』東京 音羽書房鶴見書店 2007

*Tess of the d'Urbervilles:*  
**The Emergence of Sexual Consciousness and  
Visual Metaphors**

**TANIYAMA, Tomohiko**

*Tess of the d'Urbervilles* is undoubtedly the most famous novel of Thomas Hardy's numerous works. The novel's shocking representations of woman's sexuality made it controversial in Victorian society, which, in turn, made the author more well-known. Through its fierce representations of sexuality, however, the novel revealed problems in Victorian culture surrounding morality, sexuality and marriage.

In Victorian culture, women were confined by strict codes of etiquette regarding proper manners, clothing and behavior. Those concerned with sexuality, especially, were most serious. Women were thought of as faithful and asexual beings like pure angels. In the novel, Hardy challenged this view of woman by attempting to depict the truth. In the strictness of Victorian society, however, strict censorship in publishing world made it quite difficult to honestly represent women's sexuality. Hardy, therefore, chose to use metaphorical representations to depict it indirectly.

*Tess of the d'Urbervilles* is filled with metaphorical representations. Representations of light and darkness, particularly, which surround the body of the main character, hold the most important function in the novel. Employing chiaroscuro Hardy visually emphasizes the bodily presence of characters. Meanwhile, he also uses the technique to depicts their emotions about corporeal problems. Through such characteristic expressions, the complex consciousness on the body and sexuality is revealed to readers.

The novel's narrative lies in revealing the life of Tess, the history of her love affairs, and growing awareness of her sexuality. She was a woman loved by two very different men, Alec D'Urberville and Angel Clare. Her relationships with the two men awaken her to both the sexuality within her body, something

she had never known before, and awareness of the guilt surrounding that awakening. The light and darkness is often used to express her suffering and conflict connected with sexuality.

Alec is portrayed as Tess's seducer. He holds strong sexual desire for her physically, and through his strong lust, tries to dominate her. As ways of showing his desire, Alec stimulates her physically using means such as continually touching her body as well as teaching her to whistle. With such curious practices and experiences, her sexual sense of pleasure is awakened, visually emphasized with shining light. Tess is perplexed regarding such unknown bodily enjoyment. Feeling such pleasure, she suffers, bound by a moral consciousness of having violated the something inviolable. Conflicted, she also anxiously desires to be dominated by such pleasure Alec offers. Inevitably this anxiety brings her consciousness to a crisis. To defend her soul from the crisis Alec has brought, she sinks her soul into an abyss of darkness, secluding her consciousness from her body. In this way, she attempts to resist Alec's lust. Whenever he expresses his desire for her, by forcing her awareness away from her from body, she strives to protect the peace within herself. Such movement of consciousness is represented quite visually, especially in the scene where Alec forces himself upon her. Dramatic scenes such as this, which surround her, are darkened, when her soul is separated from her body. The darkness acts to express the absence of her soul in her body, and her will to resist against Alec's domination.

Through her experience of life with Alec, she comes to know the forbidden pleasure of her sexual self and an awareness of guilt surrounding such feelings. She suffers through this conflict on sexuality. After the parting from Alec, she meets Angel Clare, a man of very different qualities compared to Alec. Angel is intellectual and philosophical, and Tess gradually becomes more fascinated with him. Her soul feels sympathy for his soul. But Angel also attempts to dominate her, not by bodily lust but by his ideas of womanhood. Though he is well-educated man, his mind is confined by a quite conservative view of women. In this the Victorian view, he idealizes Tess as a pure angelic woman. His desire for her reflects to the scenery of the place where they rendezvous. She is surrounded by misty twilight, the somber space making her appear like a goddess. For Tess, who now has experienced the corporeal pleasure and its sins, this was quite unacceptable. She, therefore, refuses to be the divine female. Her refusal

is also represented visually. When she denies Angel's idealized image of herself, her bodily presence is emphasized by light representing her refusal.

But she cannot help being attracted to Angel. Aware of her guilt, she feels lust for him. The sexual urge, which Alec awakened in her, pushes her on. She secretly longs for bodily contacts with Angel. Like Tess, Angel is also gradually fascinated by her corporeal beauty. Through such bodily desires they become attracted to each other. As with Alec, the lust between Tess and Angel is also represented by shining light. Light emphasizes the presence of their bodies and their beauty, implying the secret pleasure between them. For both Tess, however, who experienced both love and violation with Alec, and Angel, with his conservative view of women, the pleasure they share inevitably makes them conscious of guilty and suffering.

After Tess confesses her secret past, the conflict and suffering over sexuality become decisive. For Angel, Tess's body, which experienced such raw sexuality with Alec, becomes an object of fear. Her sexuality, overwhelming his mind, is expressed by visually by light. Ironically, Tess's experience with Alec becomes the cause of Angel's mental anguish.

After this incident, Tess is filled with a growing desire to take responsibility by destroying her sexual self to make Angel suffer. She unconsciously longs for death, but cannot kill herself because she also knows how much she enjoys sexual pleasure. The pleasure prevent her from leaving the body easily, filling her with ambivalent emotions about her sexual body. As a way of resolving this crisis within, Tess idealizes the darkness as a place of rest. The darkness diminishes her bodily senses to a minimum, bringing her an experience of pseudo-death, a temporal rest of mind. The darkness becomes a symbolic expression of her rest and liberation from the body. The last scene expresses this well, where Stonehenge is shrouded in darkness as Angel and Tess meet for their last rendezvous. The darkness symbolizes her rest and liberation, but is quite transient. As time passes, light inevitably intrudes into the darkened space, making her body visible and aware of its presence. Even in the last scene, the light flows into the darkness. Her rest is inevitably broken, indicating the cruel fact that as long as she lives, she cannot escape from the presence of her sexual body.

Throughout the history of her love affairs with the two men, the use of *chiaroscuro* indicates Tess's conflict of mind and emotion over her sexuality. Her

sexual sense or desire is metaphorically represented with light. The light strengthens the presence of her sexual body and reveals her hidden sexual desire for men. But feeling such pleasure, Tess suffers a guilty conscience. She feels ambivalent emotions concerning her body. To liberate herself from such suffering, she seeks to destroy her body believing it to be the cause of her distress. As a way to destroy her physical self, she longs for darkness. The darkness temporarily makes her body invisible and diminishes her bodily senses, allowing her to briefly experience bodily liberation and oblivion. Consequently, this becomes a metaphor for her mental rest. Through his expression of visible light and darkness, Hardy expresses visually for reader the suffering that women endured under the strict moral code of the Victorian era. His novel also spotlights the absurdity and double standard of Victorian oppression of sexuality on women.